

桜さく島 見知らぬ世界

特43

627

256

302

205149-000-7

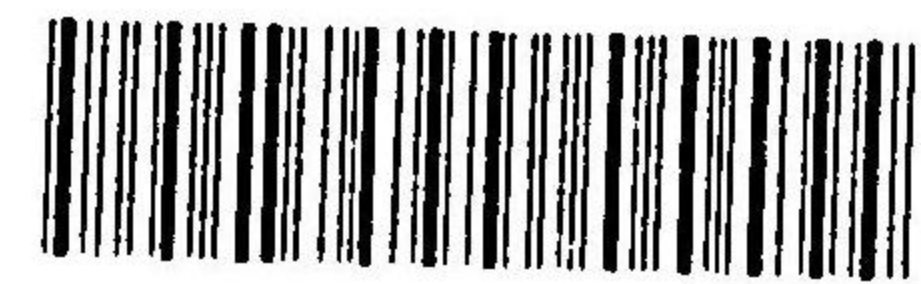
特43-627

桜さく島 見知らぬ世界

竹久 夢二 / 著・画

M45

EDV-0161





符43  
627

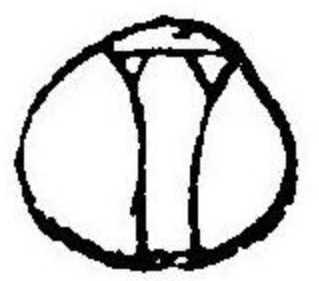


夢二作





UNKNOWN  
WORLD





青い野原のなかを、白い路がながくくついていた。  
母とも姉とも乳母とも、いまはおぼえもない。









おぼさつたその女が泣くので、私もさそはれてわけはしらずに、ほろ／＼泣いてゐた。

女の肩に頬をよせると、キモノの花模様が涙のなかに咲いたり蓄んだりした、白い花片が芝居の雪のやうに青い空へちら／＼と光つては消えしました。

黄楊のさし櫛がおちたのかと思つたら、それは三ヶ月だつた。黒髪のかげの根付の珠は、空へとんでいつては青く光つた。

また赤い簪のふさは、ゆらく／＼とゆれるたんびに草原へおちては狐扇の花に化けた。

少年の不可思議な夢は、白い跡をはてしもなく逸つた。



死

花道のうへにかざしたつくり櫻の間から、涙ぐむだカンテラが  
数しれずかゝやいてゐた。はやしがすむのをきっかけに、あの

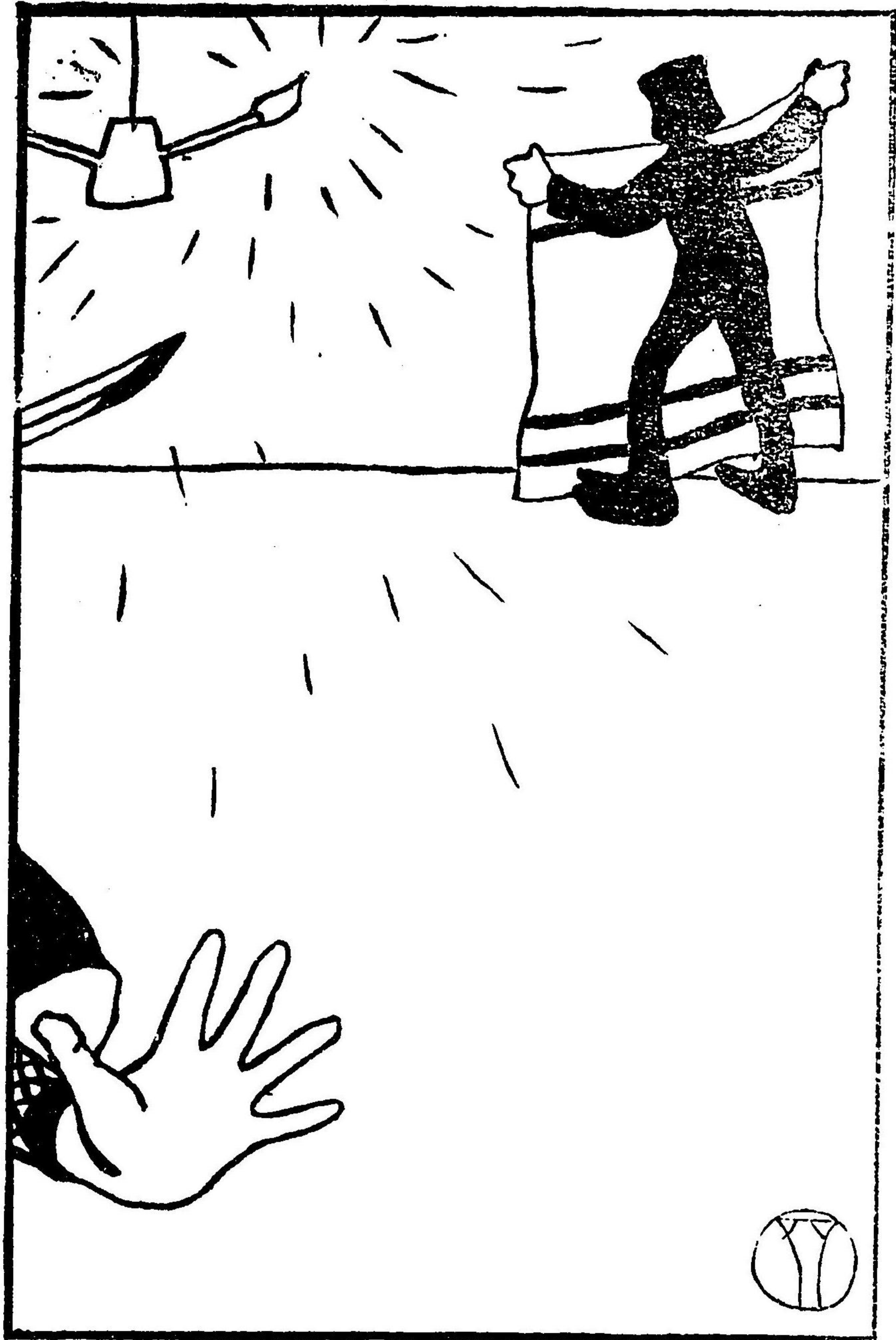
世からひいてくるかとおもはれるやうなわびしい釣鐘の音が  
きこえる。

豊の小鳥のやうないたいけな姫君は、百日盤の山賊がふりかざ  
した刃の下に手をあはせて、絶えいる聲にこの世の暇乞をする  
のであつた。

「南無阿彌陀佛」

きらりと光る金鳳のもとに、黒髪うつくしい襟足ががつくりと  
まへにうちのめつた。血汐のしたゝる生首をひっさげた山賊は、  
黒い口をゆがめてがらくからと打笑つた。







あゝお姫様は斬られたのか。

それは少年のためには「死の最初の発見」であつた。

もう姫君は死んだのだ、死んでしまへば、もうこの世で花も、

鳥も、歌も、再びさくこともみることもできないのだ。

涙は少年の胸をこみあげこみあげ頬をながれた。

「死顔」も「黒き笑も」涙にとけて、カンテラの光のなかへぎらぎ

らとさえていつた、舞臺も機敷も金色の波のなかにたいよふた。

その時、黒装束に覆面した怪物が澤村路之助丈えと染めぬいた

幕の裏からあらはれいで、赤い毛布をたれて、姫君の死骸をば

金泥の襖のうらへと掃いていつてしまつた。

死んだのではない、死んだのではない、あれは芝居といふもの

だと母は涙をふいてくれた。

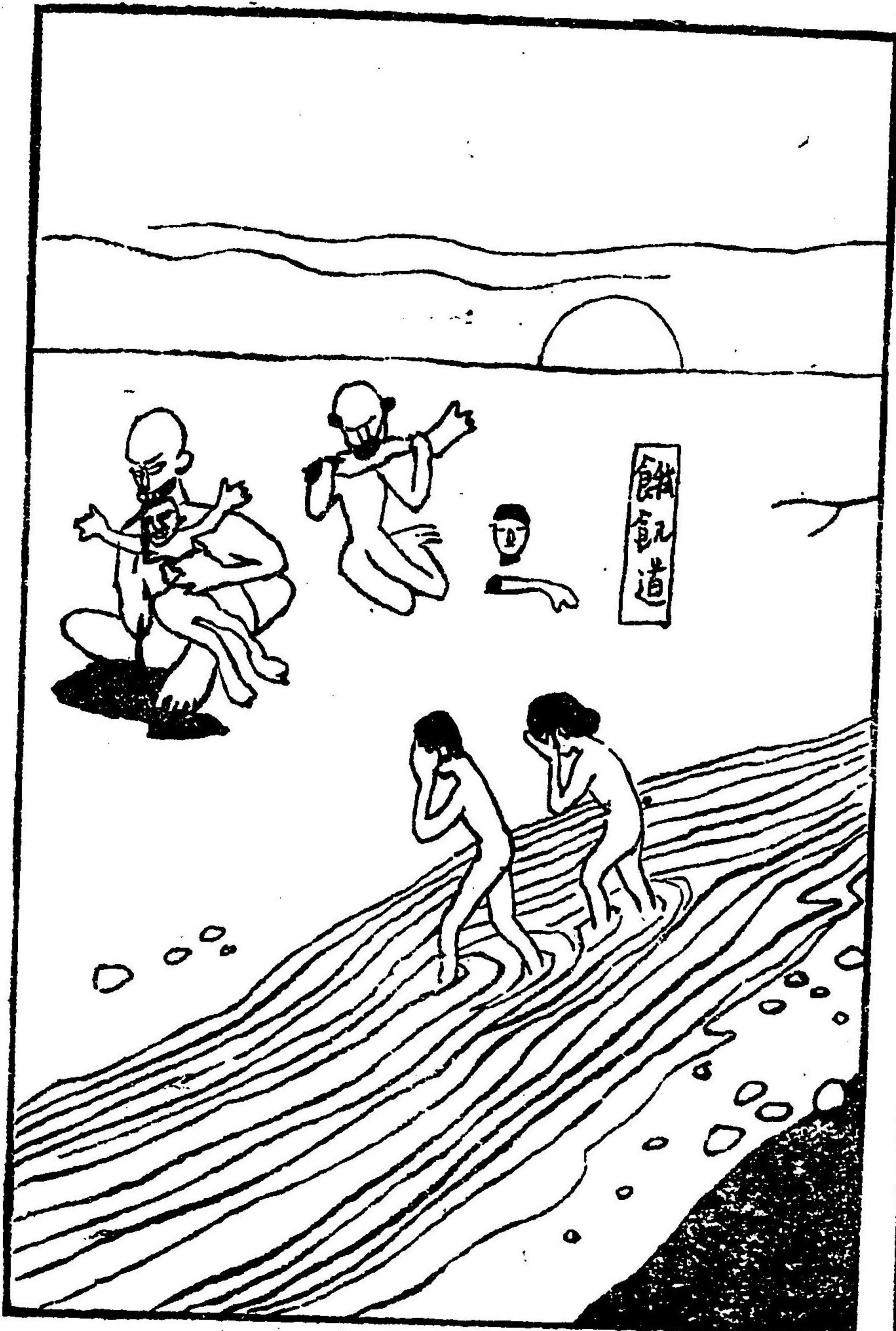
さうして少年のやぶれた心はつくのはれたけれど、舞臺のうへ

で姫君のきられたといふことは忘れられない記憶であつた。ま

た赤毛布の裡をば、死んだ姫君が歩いたのも、不可思議な発見

であつた。







傀儡師

.....大阪をたちのいても、わたしが姿眼に  
たてば、借行輿に日をおくり.....

口三味線の淨瑠璃が庭の飛石づたひにちかづいてくるのを、す  
ぐ私どもはさくつけました。五十三次の繪双六をなげだして、  
障子を細目にあげた姉の袂のしたからそつと外面をみました。  
四十ばかりの漢でした、頭には淺黄のツキンをかぶり、身には  
墨染のキモノをつけ、手も足もカウカケにつゝんでゐました、そ  
の眼は、遠い國の藍い海をおもはせるやうにかいやいてゐまし  
た。棒のさきには、鎧をきたサムライや、赤い振袖をきたオイ  
ランがたらしと首も手をたれてゐました。  
漢は自分のかたる淨瑠璃に、さも情がうつつたやうな身振をし







て人形をつかつてゐました。

赤い襦袢をきた人形は、白い手拭のしたに黒い眸をみひらいて、遠くきた旅をおもひやるやうに顔をふりあげました。

……奈良の旅籠や三輪の茶屋……

五日、三日夜をあかし……

と指おりかぞえ

……二十日あまりに四十兩、つかひはたし

て二歩のころ、金ゆへ大事の忠兵衛さ

ん……

といつて、傍らに首をたれた忠兵衛をみやつたガラスの眼には  
涙があるのかとおもはれました。

……科人にしたもわたしから、さぞにくかろう

お腹もたどう……

思ひせまつて梅川は、袖をだいてよろ／＼よろ、私の方へよろめいて、はつと踏みとまつて、手をあげた時、白い指がかりと鳴つたのです。

私は泣きながら奥へはしりこみました。



阿波鳴門順禮歌

ふる里をはるく

こゝに紀三井寺

花の都も近くなるらん

「お鶴は死なないんですねえ、母様」

「さいなあ、阿波の鳴門をこえて観音様のお膝許へいきやつた  
といのう」

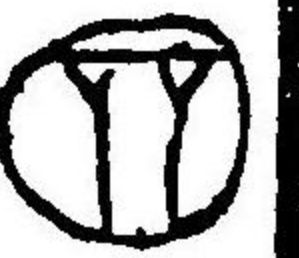
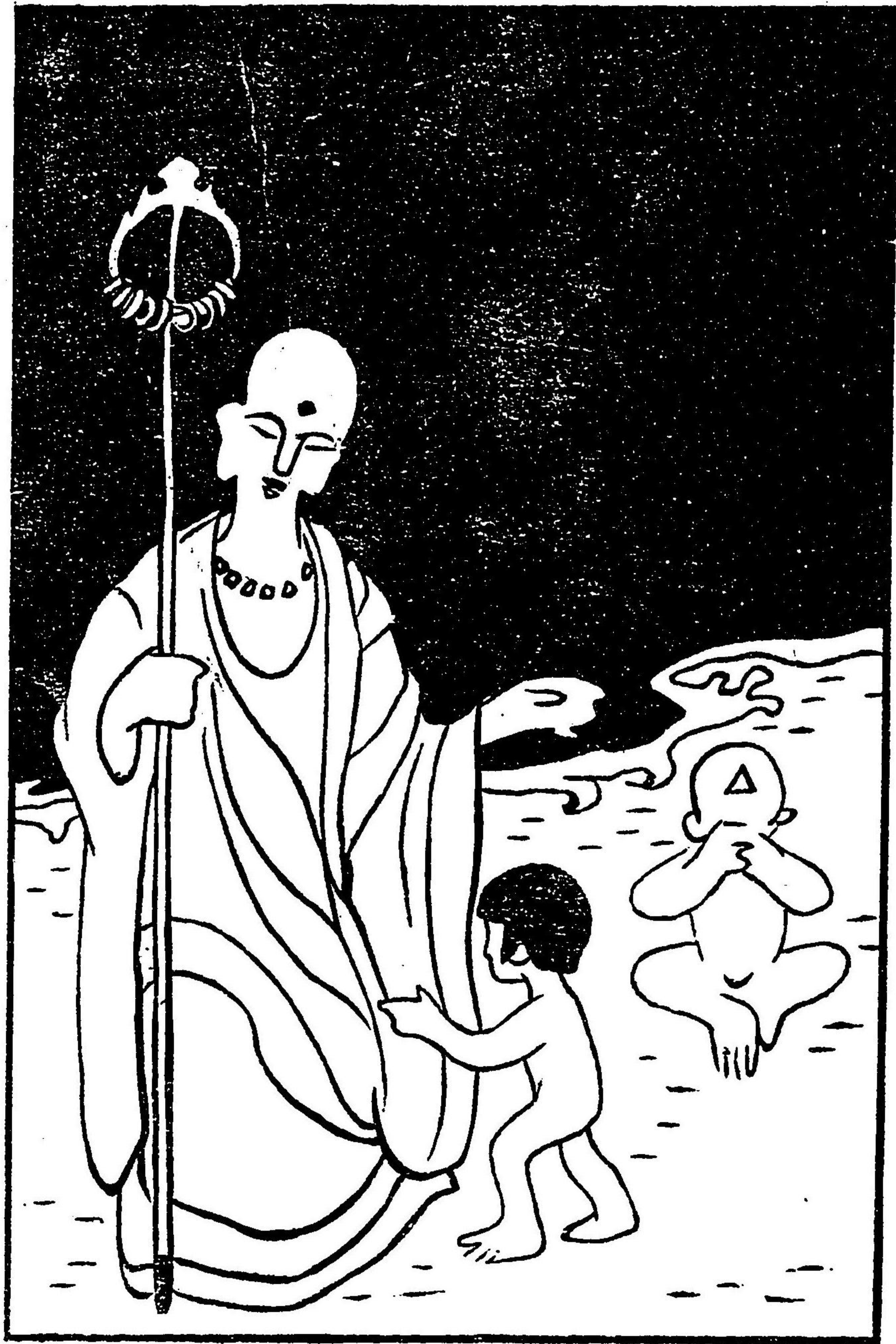
「でも、お鶴はお祖母様の手紙を母様にみせたの」

「さいなあ、お鶴の母御は、その手紙をお鶴の懐からとりだし  
て読みながらよみながらお泣やつたといのう」

「母様、お鶴は死んだの」

「なんの、死ぬものぞいの。お鶴は観音様のお膝許へいつたの」







やがな」

「母様、お鶴はなんて言つて歌つたの」

賽の河原で砂手本

一ツつんでは母のため

二ツつんでは父のため

三千世界の親と子が

死出の旅路をふだらくや

あすの夜たれか添乳せん

「か……母様」

「なぬに」

「お……お鶴は死ないませんねえ」



母

二人の少年が泊つた家は、隣村にも名だたる豪家であつた。母のわきには大きな梅の木が、青い空にそゝりたつてゐた。

私どもは柱や障子の骨の黒すんだ隔座敷へとほされた。床には棕櫚をかけた軸が掛つてゐたのをおぼえてゐる。

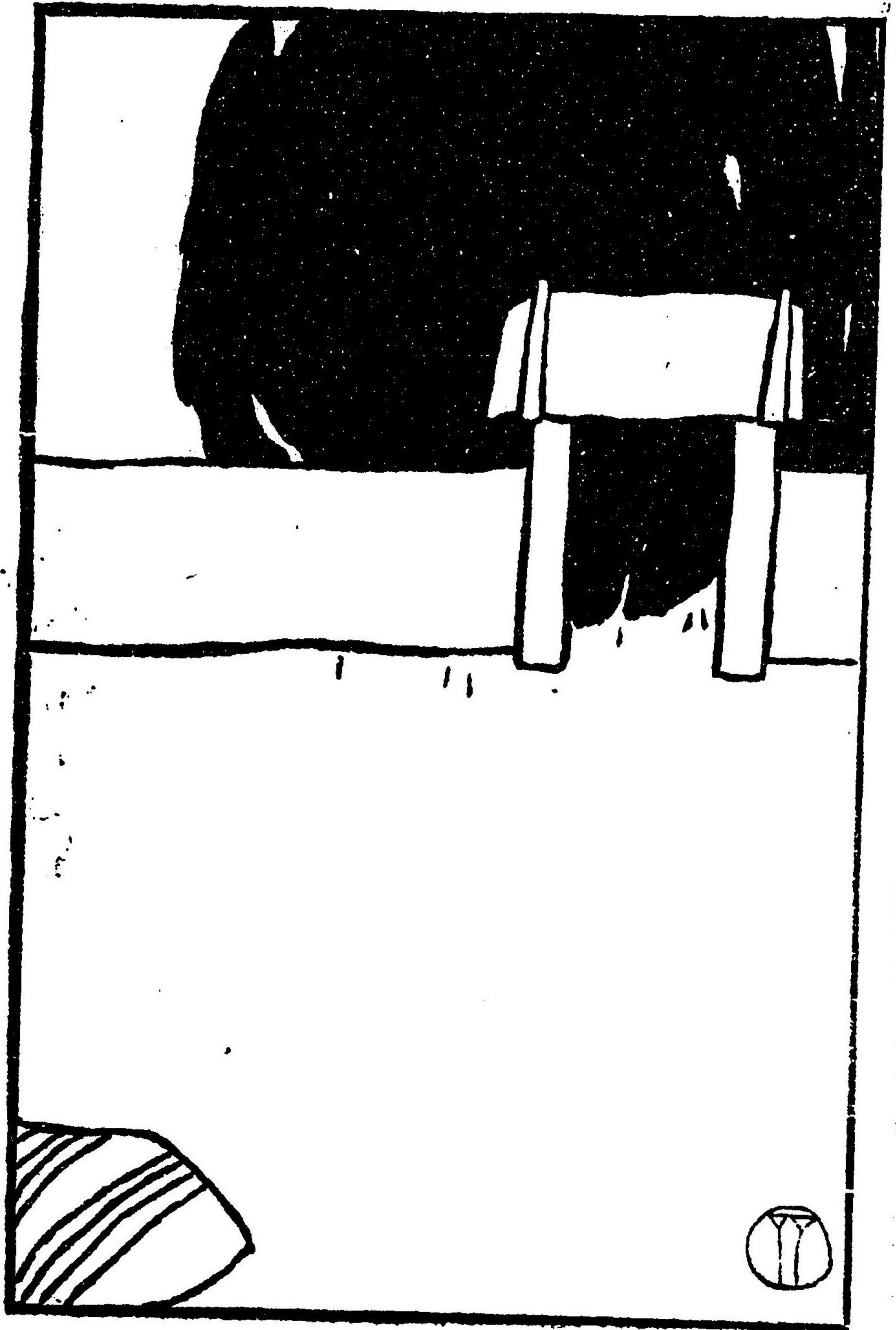
「健作の母でございます。学校ではもう常住健作がお世話様になりますとてね」

とお母様は言はれて、私の顔をしみろく情ふかい眸でみられた。私は眼をふせて、まへにおかれた初霜の皿の模様へ視線をやつてゐました。

「まあ」

と、思ひもかけぬ聲におどろいて、私ははつと顔をあげたのです。







お母様は、はしたない行ひをおしつっつむやうに

「草之助さんでござんしたか。ま、おほまきくおなりやしたこと  
わい、なんぼにおなりやんしたえ」

「十二です」

「まあそんなになりますかいなあ」と夢みる眸をあけて「よう  
まあ、よつてくださんした」

思ひいつてこういはれた言葉に、曾ておもひもしらぬ感激をお  
ぼえて、私はしみじみとよそのおばさんを見ました。齒を黒く  
そめて眉の青い人で、その眼には泪があつた。

縁側で南天の實をみてゐたら、おばさんはうしろから私の肩を  
袖で抱いて

「おばあさんもおたつしやですかえ」  
とさかれた。

千代紙や江戸繪をお土産にもらつて、明る日、村へかへつてき  
ました。

祭の日が暮れて友達のうちへ泊つた一分始終を祖母に話してき  
かせました。すると、祖母は眼をみはつて、そのかたは父の最初  
の「つれあひ」だつたと驚かれました。

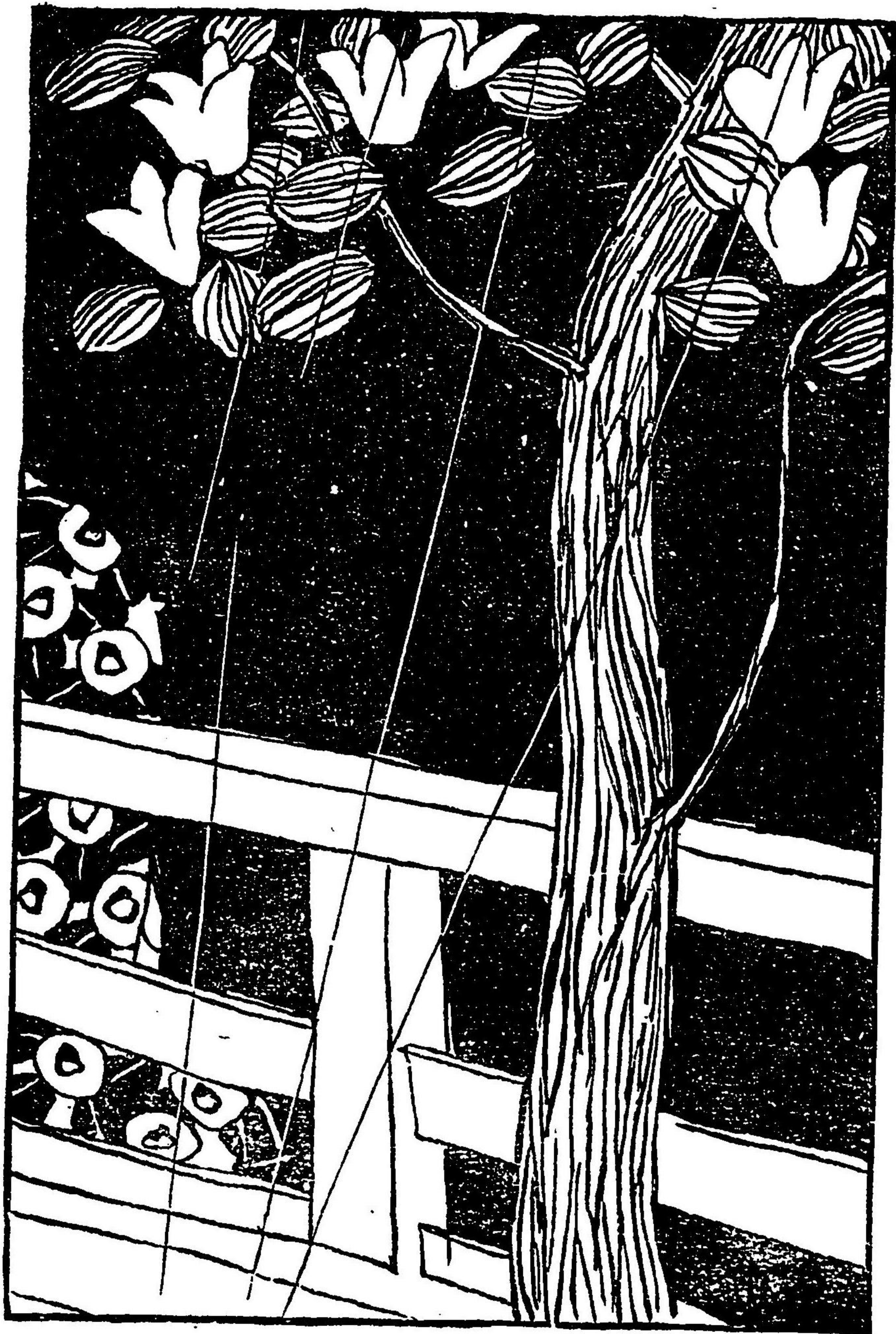


この日から、少年のちいさい胸には大きな黒い塊がおかれま  
した。妬ましさにて嬉しく、悲しさにて懐しい物思をおぼえそ  
めたのです。藏のまへのサボランのかけにかくれては私とおな  
しに眼のわきに黒子のある、なつかしいその人のことを、人し  
れず思ひやるならはせとなつたのです。ですが私は、その人が  
私の「生みの母」であるといふことをたしかめるのを恐れまし  
た。やつぱりよそのおばさんです。私は、さう思つてゐねばな  
りませんでした。

### 窓のムスメ

中窓の欄干にもたれて雨だれをみてゐるムスメがあつた。  
肩場のある羽織には、椿の模様がついてゐた。髪はおたばこほ







んにゆつてゐたやうに思はれる。

俯向いてゐたゆえ、顔はどんなであつたかそれはわからない。

けれど、五月雨の頃とて、淡青い空気にへだてられたその横顔

はほのかに思ひうかぶ。

戸外にはカリンの木がうはつて、淡紅の花の香が暗い雨の庭に

たちまよふてゐた。

それが何時であつたとも、そのムスメが誰であつたとも今は知

るよしもない。

母にきけど、そんな窓は見たことがないといふ。

母にきけど、そのやうなムスメは知らぬといふ。

その頃よんだリイダアなどの繪の女かとおもふけれど、それも

たしかでない。

ムスメはつひに俯いたまふ、いつまでも、私の記憶に青白い

影をなげ、灰色の忘却のうへを銀の雨が降りしきる。



炬燵のなか

……お庭のまえの露間に

君をはじめてみるときは

千代もへぬべき心地して……

美迦野さんは、炬燵布団の綴糸をまるい白い指ではじきながら、障子の琴歌に聲をあはせた。

「あたしね、「黒髪」をあびたらこんどは「春雨」だわ。いゝわね。はるゝさめ……」

「……………」

私はだまつて美迦野さんの唇にうつとりとみとれてゐた。

「草之助さんては返事がない、いゝ嫁さんでもとつたのかい」







「……」私わたしは笑わらつてゐた。

「なせだまつてるのさ。なにかおこつたの」

「うゝん」

「さ、」がさした」

「二がさした」

「三がさした」

「四がさした」

「五がさした」

「六がさした」

「七がさした」

「蜂はちがさした、ぶんくぶん……」

「いや、美迦みかさんはあんまりひどくつねるんだものを」

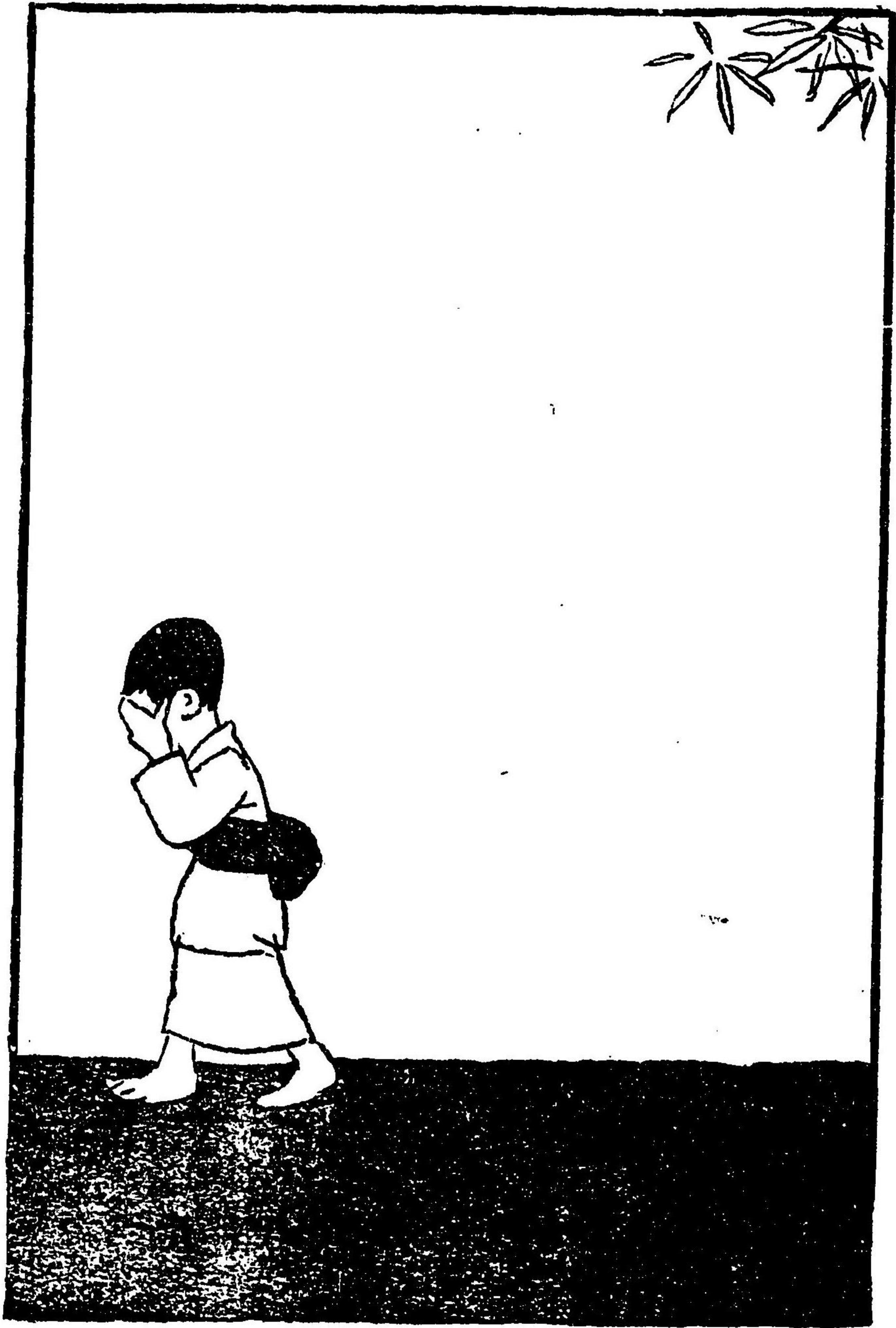
「いたかつて、ごめんなさい」

そう言つて美迦みか野のさんは、あまへたやうにしんなりとしなだれかゝつて

「まあおかわいそうに」

と言つて、赤あかくなつた私わたしの手てを熱あつい唇くちびるでひつたりと吸すひました。布團ふとんを眼深まぶたかにかぶつた小鳩こ鳩のやうに臆病おびょうな少年せうねんはおどくし







ながらも、女のするがまゝにまかせてゐた。  
少年は女の顔をみあげるのさえはづかしかった。

明治四十五年四月二十一日印刷  
明治四十五年四月二十四日發行



櫻 さ く 島  
見 知 ら ぬ 世 界

定價 五拾錢

著者 竹久夢



發行者 河本龜之助

東京市麹町區麹町二丁目九番地

印刷者 藤田千代吉

東京市麹町區麹町二丁目九番地

印刷所 千代田印刷所

發行所

東京市麹町區麹町二丁目二番  
振替口座東京二〇九一四番

洛陽堂



256  
302

櫻とく國

春のかはたれ (既刊)

見知らぬ世界 (既刊)

三味線のメモ (近刊)

日本のムスメ (近刊)

濱のわかれ (近刊)



